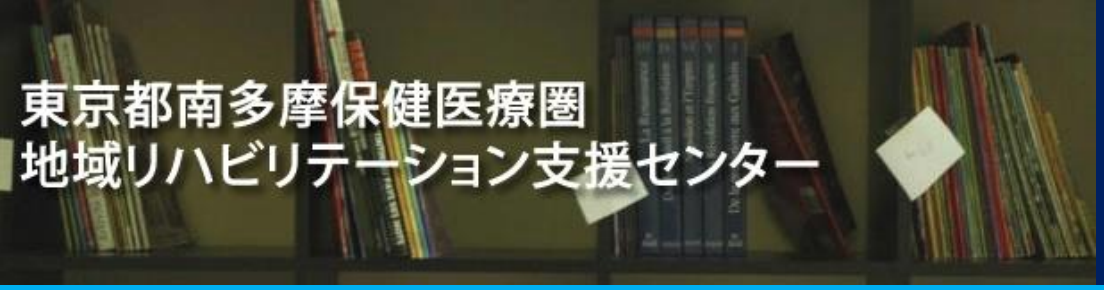


南多摩リハビリスタッフ合同会議
第5回学術集会
シンポジウム

平成20年度の南多摩圏域における調査より

井出　大[1)2)]、今村安秀[2)]、石濱裕規[2)]、渡邉要一[2)]

1）医療法人社団永生会南多摩病院リハビリテーション科
2）医療法人社団永生会永生病院地域リハ支援事業推進室

平成22年3月7日

1. 目的

東京都南多摩圏域の患者（利用者）様がより安心して在宅生活を送るため、その在宅復帰後の実情をサービス提供側であるわれわれが理解し、退院や退所に際しての準備、連携に役立てる。

2. 対象

- **患者（利用者）様**

  平成20年8月1日～10月末日に南多摩医療圏域の医療機関・施設に入院・入所し、ご自宅へ帰られた方で介護保険の適応となっている方。

- **セラピスト**

  平成20年12月時点で、南多摩医療圏域の医療機関・施設に在籍していた常勤のPT・OT・ST

3. 調査方法

調査期間　平成20年12月22日～平成21年2月14日

調査方法　セラピストを通じ、患者様にアンケート調査を依頼した。匿名記入とし患者様調査とセラピスト調査をコードにより照合可能とした。

患者様アンケート

1. 基本属性　（年齢　性別　病名　要介護度）
2. 利用サービス　◎利用の有無（16項目）　◎利用サービスへの満足度（各5段階）
   ◎重要度（利用有無に関らず）（16項目中複数選択可）
3. （現在の）不安（20項目中複数選択可）

セラピストアンケート

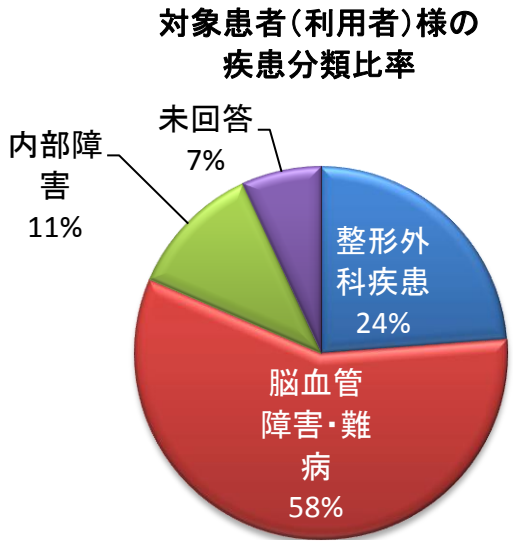
1. 基本属性　（年齢　性別　経験年数　職種　勤務先施設形態）
2. 病棟種別　（病院勤務者）
3. 退院指導　◎指導の有無　◎紹介サービス　◎重要度（16項目中複数選択可）
4. 不安（退院（退所）時）（20項目中複数選択可）
5. 連携の必要性と重要項目　（8項目中複数選択可）

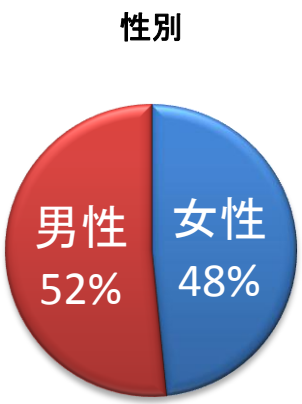
4-1.結果 （属性）

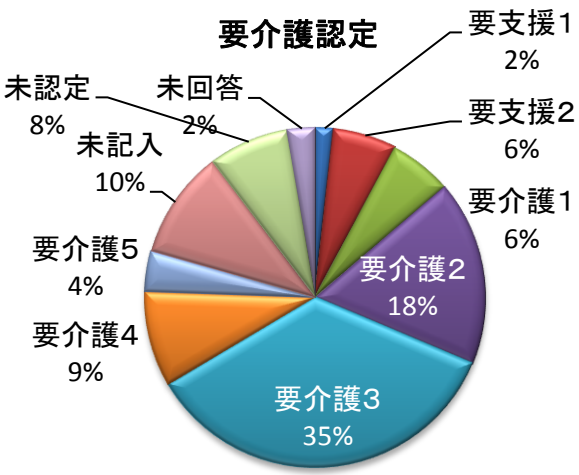
対象患者（利用者）様

回収数：189名（回収率47.8%）

平均年齢：78.2±11.6歳





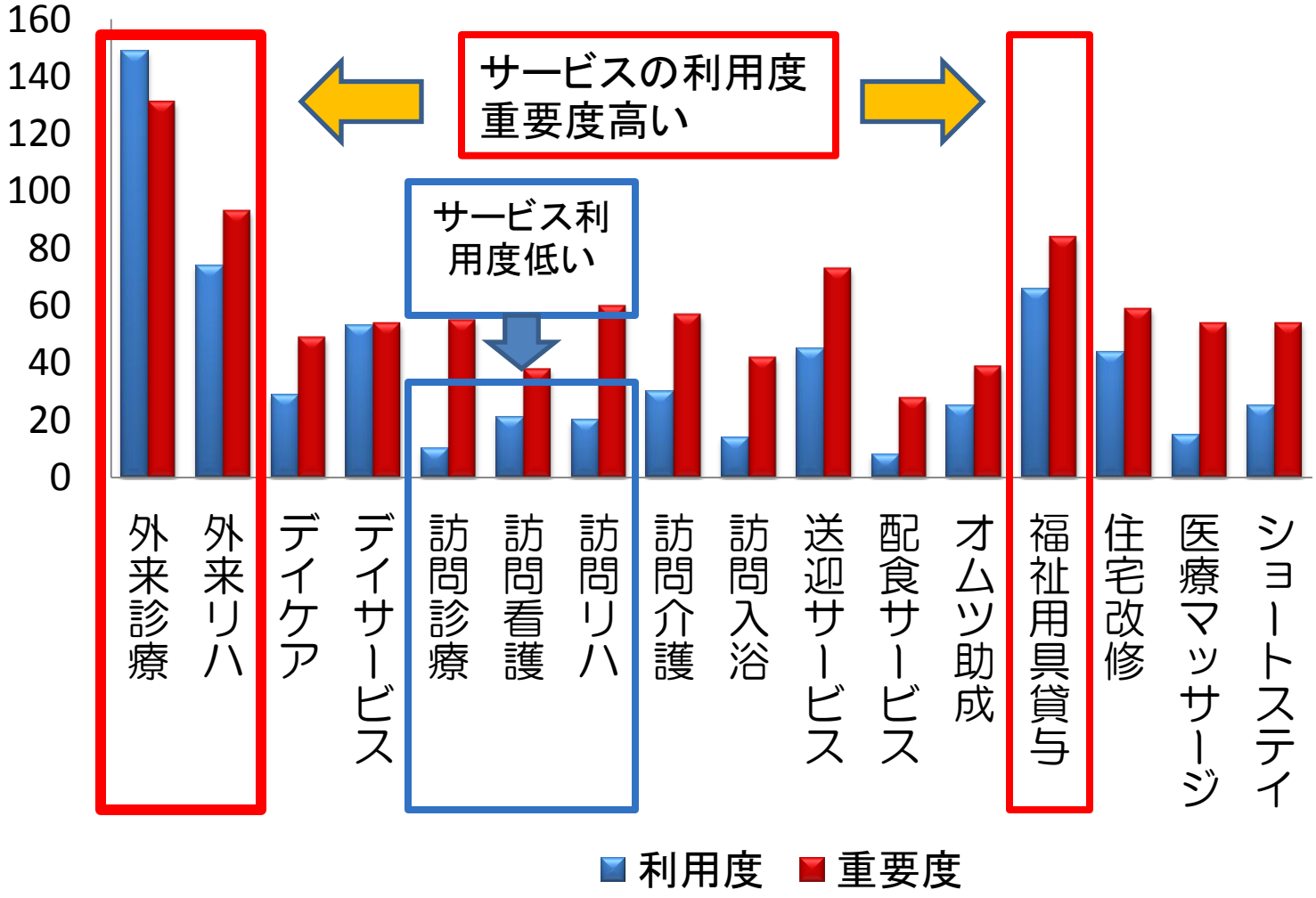


セラピスト

参加施設数：33

回収数		423名 （回収率70.5%）
平均年齢		28.9±6.1歳
経験年数		4.98±4.8年
職種	PT	276名
	OT	106名
	ST	39名
所属	病院	408名
	介護老人保健施設	14名
	病院・老健兼務	1名

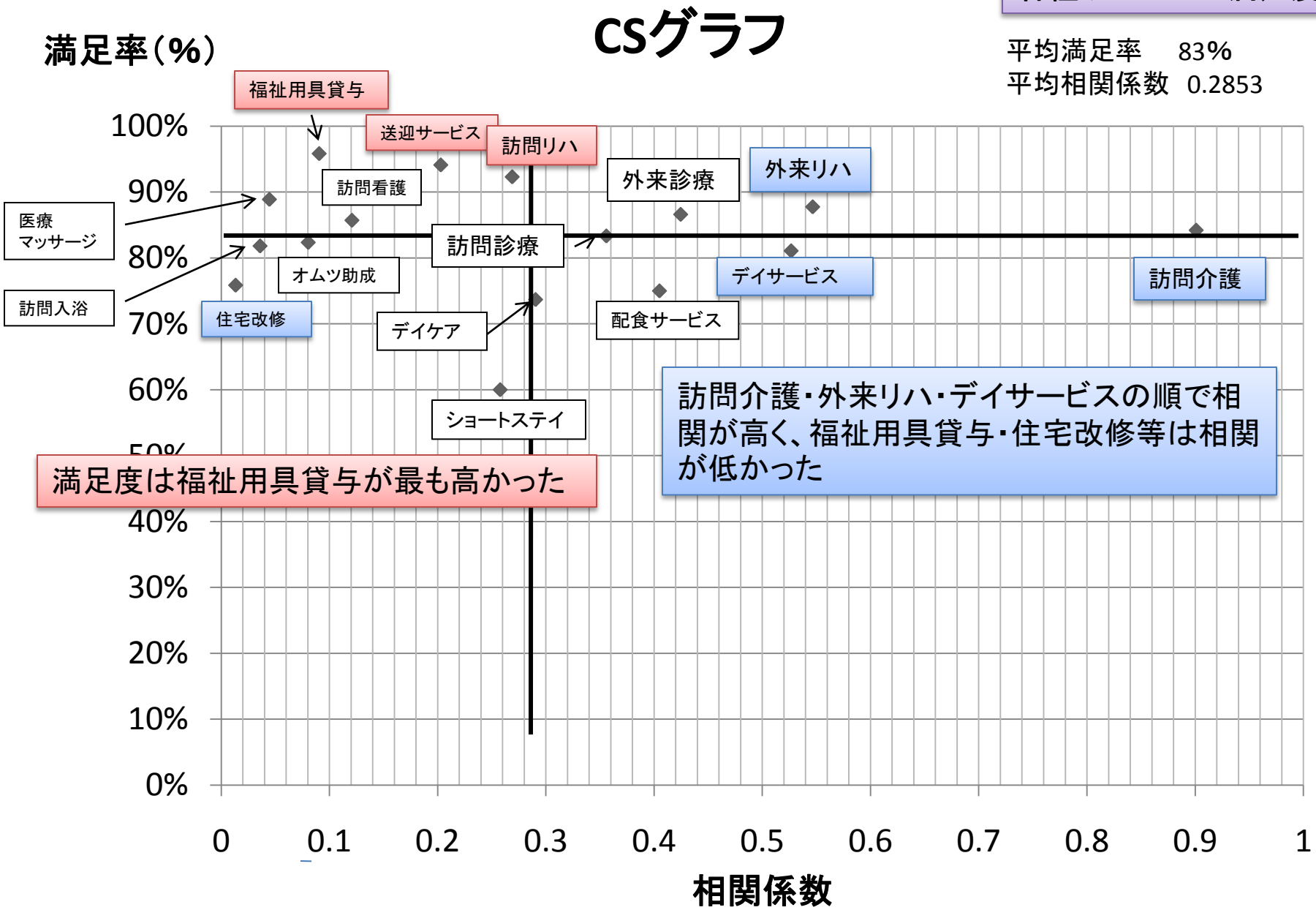
4-2. 結果 （サービス利用度・重要度～患者・利用者様～）



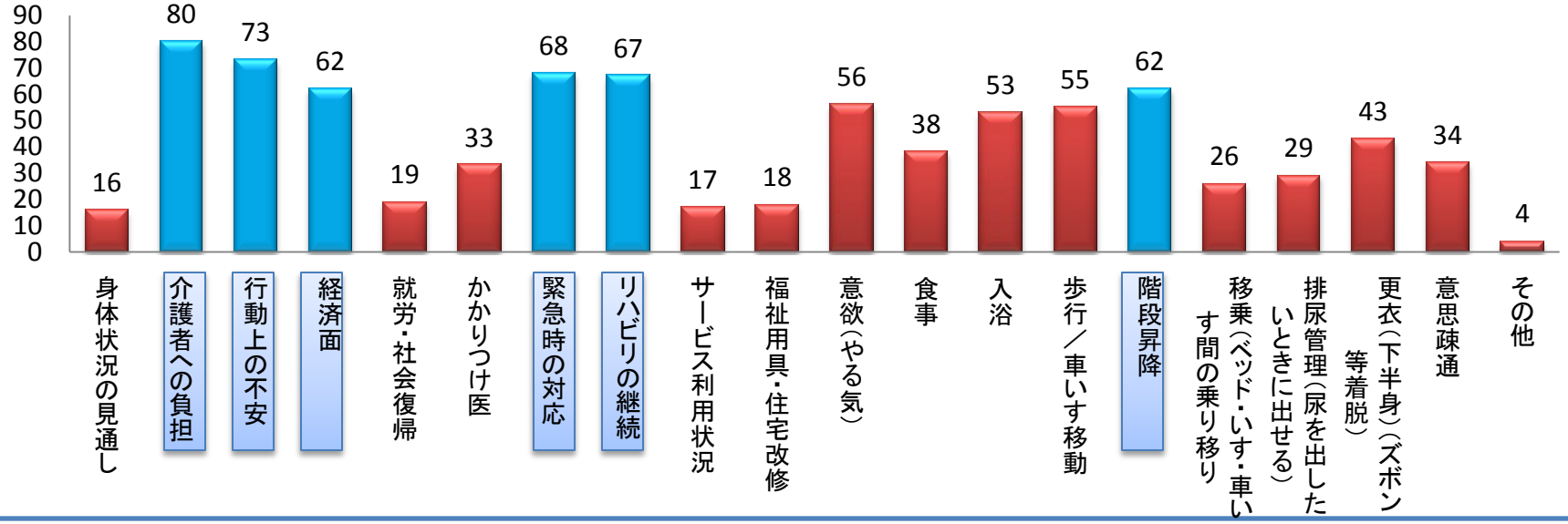
4-3. 結果 （サービス満足度）

各種サービスの満足度

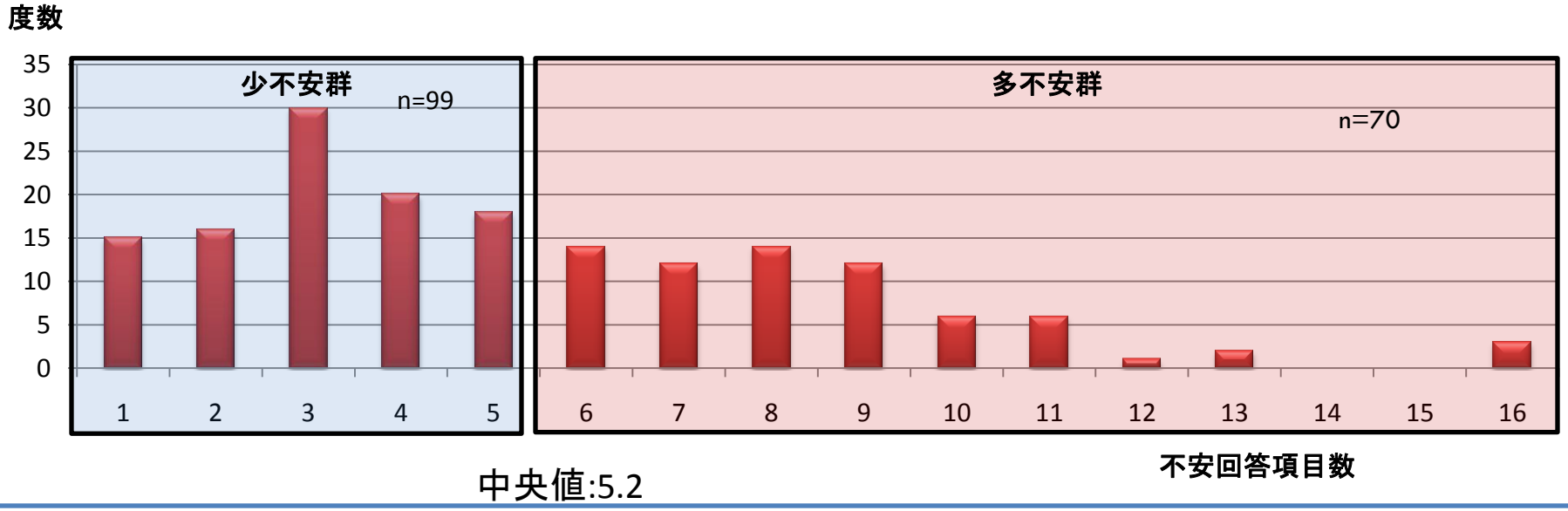
平均満足率　83%
平均相関係数　0.2853



4-4結果 （患者（利用者）様が感じる不安の項目）

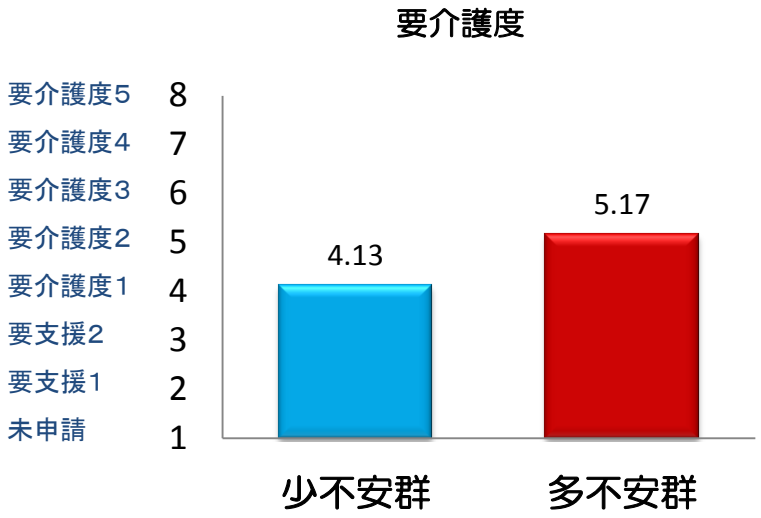


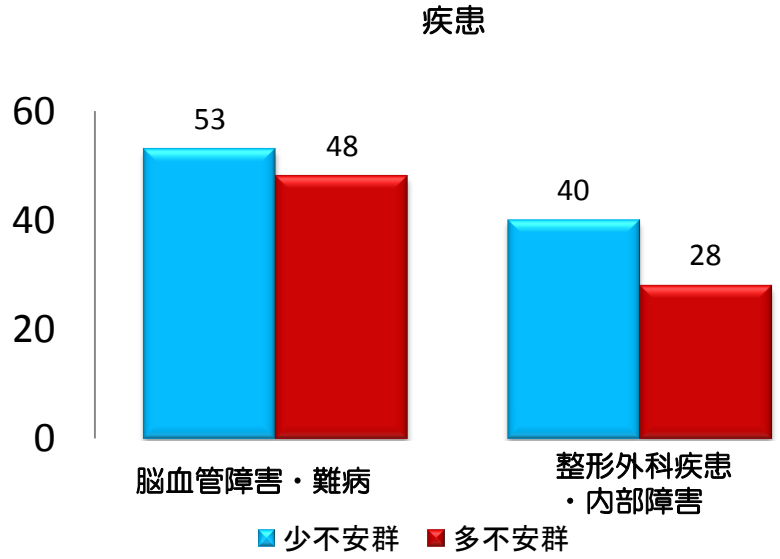
４－５ 結果 （不安項目の回答数による2群化 ）



中央値:5.2

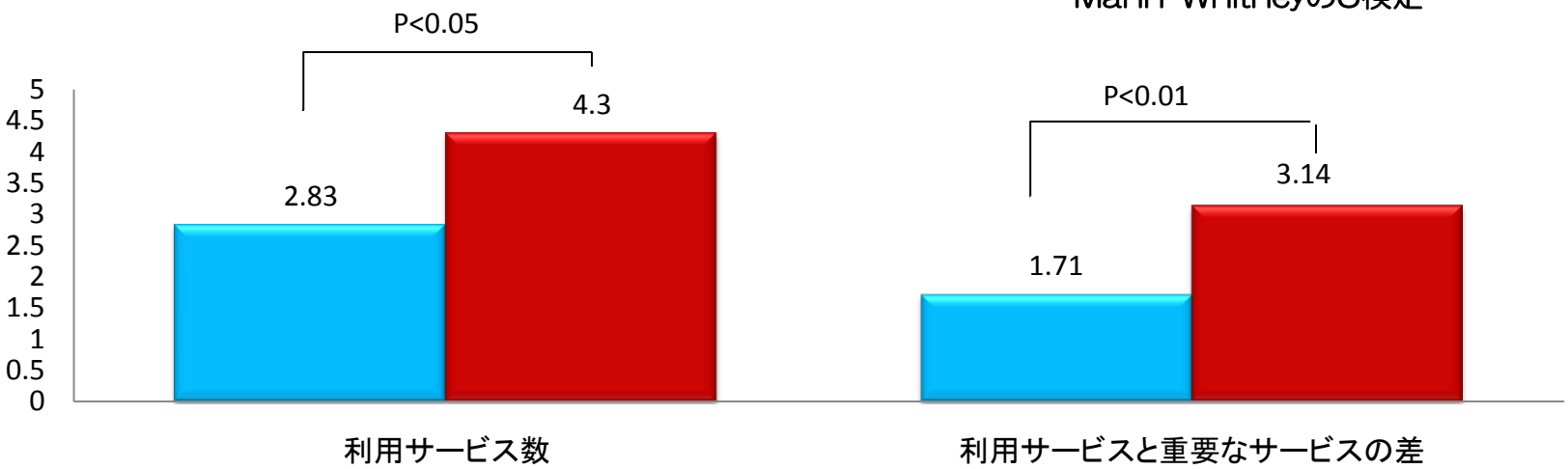
４－６　結果（2群間の要介護度・疾患における比較）





４－７　結果　（2群間におけるサービス利用度の比較）

Mann-WhitneyのU検定



多不安群では、利用サービスと重要なサービスが一致しない人が多かった。

４－８　結果　（一致度からみた比較）

- 患者（利用者）様とセラピストの照合可能であった回答（n=135）より、補正した正解率を一致度として多不安群－少不安群間の比較を行った。

一致度

患者－担当セラピスト間での一致項目

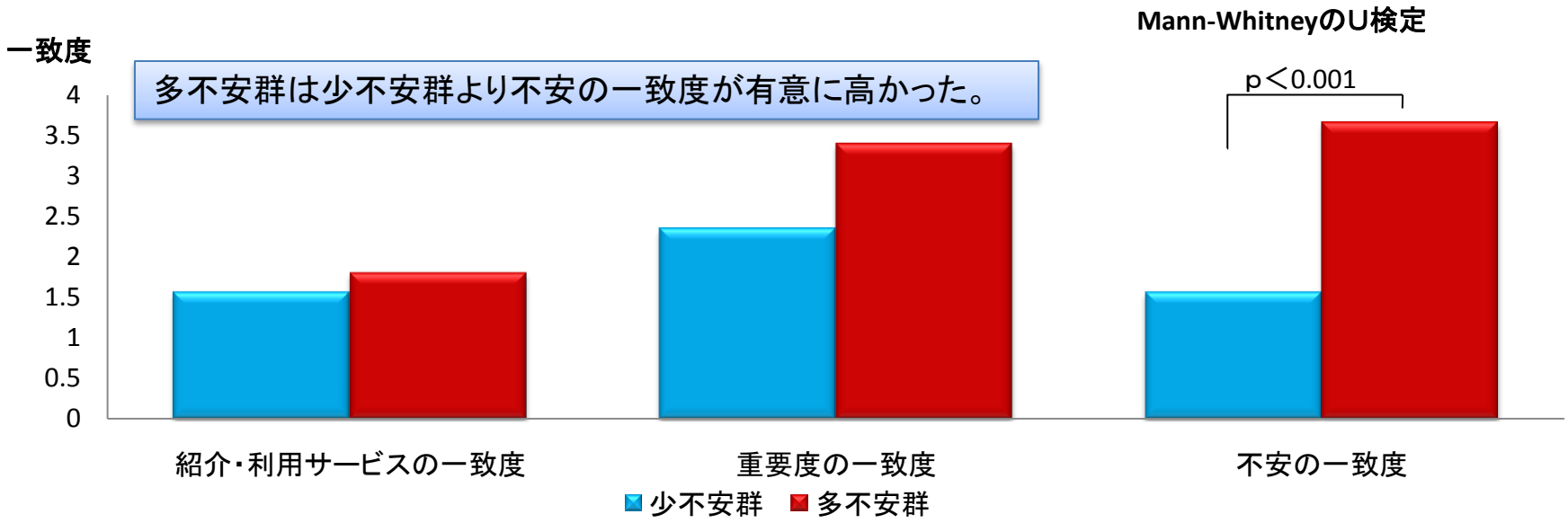
自由回答形式
- **利用（紹介）サービス**
- **サービスの重要度**
- **不安**

$$\text{回答数による正解率を補正した一致度} = \frac{\text{一致項目数} \times \dfrac{\text{患者回答項目数}}{\text{セラピスト回答項目数}}}{\text{一致項目数}}$$

＊患者回答数に反比例し、セラピスト回答数に比例
「数打ちゃ当たる」「的が多ければ当たりやすい」偏りを補正

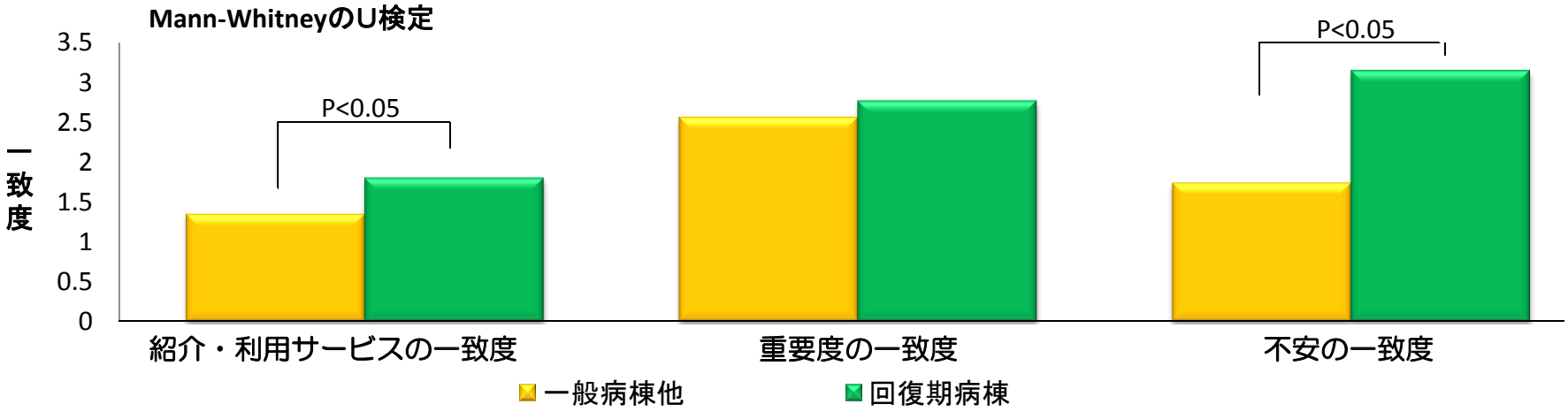
４－９　結果　（紹介・利用サービス、重要度、不安の一致度からみた少不安群－多不安群間の比較）

多不安群は少不安群より不安の一致度が有意に高かった。



４－１０　結果　（紹介・利用サービス、重要度、不安の一致度からみた病棟種別による比較）

回復期病棟では、セラピストが紹介し、患者（利用者）様が実際に利用しているサービスの一致度は有意に高く、セラピスト・患者（利用者）様双方が感じた不安の項目の一致度も、有意に高かった。



5. 考察

各種サービスの利用度と重要度

退院後は外来での医療サービスに比べ在宅医療関連サービスの利用度・重要度が低い傾向

↓

在宅医療関連サービスの認知度が低い可能性

各種サービスの満足度と全体の満足度の関係

各種サービスの満足度と全体の満足度との相関は訪問介護・外来リハ・デイサービス（いわゆる人的支援サービス）で高く、住宅改修・福祉用具貸与で低い

↓

全体の満足度は、人的支援サービスの満足度の影響を受けている可能性

不安についての検討

患者（利用者）様が退院時に不安に感じる項目数が多いと利用サービス数は増加する傾向

多不安群では、利用サービスと重要なサービスが一致しない人が多かった。

より満足できる・質の高いサービス提供が必要

脳血管障害・難病で要介護度が高い場合、患者（利用者）様・セラピスト双方が不安に感じる項目数も多く不安の一致度は高い

↓

より重度で回復に期間を要する場合、退院後に不安に感じる項目数も多い

↓

回復期病棟等でリハ職種が関わる期間・密度が確保されると仮定

↓

退院後の不安をセラピストが予測できる可能性

まとめと今後の課題

- 圏域内の病院・施設から退院した患者（利用者）様のサービス利用度・重要度・満足度・不安について調査した。
- 患者（利用者）様とセラピストの回答を照合し一致度（補正された正解率）を算出し各調査項目との関係を分析した。
- 不安に感じる項目の多い群は、脳血管障害・難病で要介護度が高く、利用サービス数も多い傾向がみられた。
- 今後、どのような利用者が退院後にいかなる不安を感じやすいのかを考慮しながら、よりよい在宅サービスの提供がなされるべく連携し支援していく必要がある。そのためにも連携のパートナー・方向性を常に意識していくことが大切である